



〒113-0033 東京都文京区本郷7丁目2-2 本郷ビル9F
日本神経科学学会

TEL: 03-3813-0272 FAX: 03-3813-0296
E-mail office@jns.org

第28回日本神経科学大会 2005年7月26日(火) - 28日(木) パシフィコ横浜

日本神経科学学会 会員各位

第28回日本神経科学大会 (Neuroscience2005)の開催が、2005年7月26日(火) - 28日(木)に迫ってきました。事前参加登録をされた方々には、大会参加証(ネームカード)、プログラム冊子、大会CDROM等を、6月23日に郵送致しましたので既にお手元に届いていることと存じます。事前参加登録をされなかった学会会員の方々には、本神経科学ニュース(7月15日号)に大会CDROMのみを同封しました。このCDROMは、プログラム一覧・英文演題抄録などを含んでおり、演題名、著者名、抄録全文検索や、個人スケジュール作成などの機能があります(対応OSはWindows版がWindows98以降XPまで、Mac版がMacOS8.6以降MacOSX 10.3まで)。本神経科学ニュースに「CDROMの役に立つ使い方」という記事を掲載しましたので、詳しくはそちらをご参照下さい。また大会に関する詳しい情報は、大会ホームページ(<http://www.congre.co.jp/neurosci2005/>)でご覧になれます。多数の方々の大会へのご参加をお願いいたします。

本大会では、特別講演5題、受賞講演3題、シンポジウム演題235題、一般口演110題、ポスター演題894題、ランチオンセミナー演題21題、合計1268題の演題をお寄せ戴きました。単独大会としてはこれまでで最大の規模となります。また、ポスター会場・機器展示会場も、6,000m²と従来の倍の面積

目 次

第28回日本神経科学大会 2005年7月26日(火) - 28日(木) パシフィコ横浜	1
CDROMを使ったプログラムの検索法	2
研究者を妻にもって	4
女性会員比率からみる日本神経科学学会における男女共同参画	5
第31回国立大学法人動物実験施設協議会に参加して	7
第82回日本生理学会大会 日本神経回路学会連携シンポジウムに参加して	9
電子メールによるお知らせについて	9
ホームページのリニューアルについて(第2報)	9
シンポジウム・研究会のお知らせ	11
研究助成	16
公募	16
その他	19
編集後記	19

を使って、フードコーナー・ドリンクコーナーを中心に、休憩区画・インターネット区画・機器展示区画を同心円状に配置した斬新なデザインを試みました(具体的にはホームページを御覧下さい)。学会員の皆様が気楽に集い、情報交換・収集ができる空間を設計したつもりです。

また、今大会の懇親会(NEUROsocial と名づけました)は、従来と目的を変えて、若手研究者が特別講演・シンポジウム講演者をはじめとする先生方と、ドリンクを片手に気軽に話ができる環境を提供することをめざしています。7月26日18:00より開催、当日参加費は1500円です。ワインの等級などはグルメ派の方のご要望には添えないかもしれませんが、神経科学研究者間の新しいsocialの試みに多数の方がご参加下さることを願っています。

日本神経科学大会は、学会員の為に学会員によって運営されるべきだとの基本を堅持したいと思います。大会運営に関するアンケート用紙を大会会場内に置きましたので、ご意見を投函して下さるようお願い致します。学会事務局体制を強化して大会運営の年度間継続性を確保するよう努力していますので、アンケート以外でも、今年の経験を来年以降に生かすために、大会の運営について御意見・御要望等を学会事務局(office@jnss.org)へお寄せ下さい。

第28回(2005)日本神経科学大会
大会長 宮下保司(東京大学医学部)
実行委員長 西川徹(東京医科歯科大学)
プログラム委員長 森憲作(東京大学医学部)

CDROMを使った プログラムの検索法

学会員の皆様は学会に参加される前にどのような準備をなさいますでしょうか。発表される方はポスターやスライドの作成や発表練習、遠方から出かける方はホテルなどの予約、また会場やホテルの近くにあるおいしいお店を探される方もいらっしゃるかと思います。しかし、大会プログラムや演題の確認をされない方はいらっしゃるのではないのでしょうか。

米国神経科学学会大会のような大きな学会では抄録集が電子媒体として発行され、著者や題名、抄録本文の検索が可能になっています。また多くの方がご存

知のとおり、興味がある演題にはチェックを入れ、個人スケジュールを作成することができるようになってきました。日本神経科学大会でも2004年大会から抄録集を電子媒体(CD-ROM)で配布を始め、本大会でも作成いたしました。この神経科学ニュースに同封されておりますので御確認下さい。このCD-ROM(神経科学大会抄録ビューワ)は大会開催前に抄録本文をみることができ唯一の方法です。開発環境、工期、予算などの制約から、米国神経科学学会のSfN Abstract Viewer and Itinerary Plannerのように洗練されておりませんが、抄録全文検索、個人スケジュール作成機能などがございますので、ぜひご利用いただき、学会員の皆様の手助けとなればと思います。

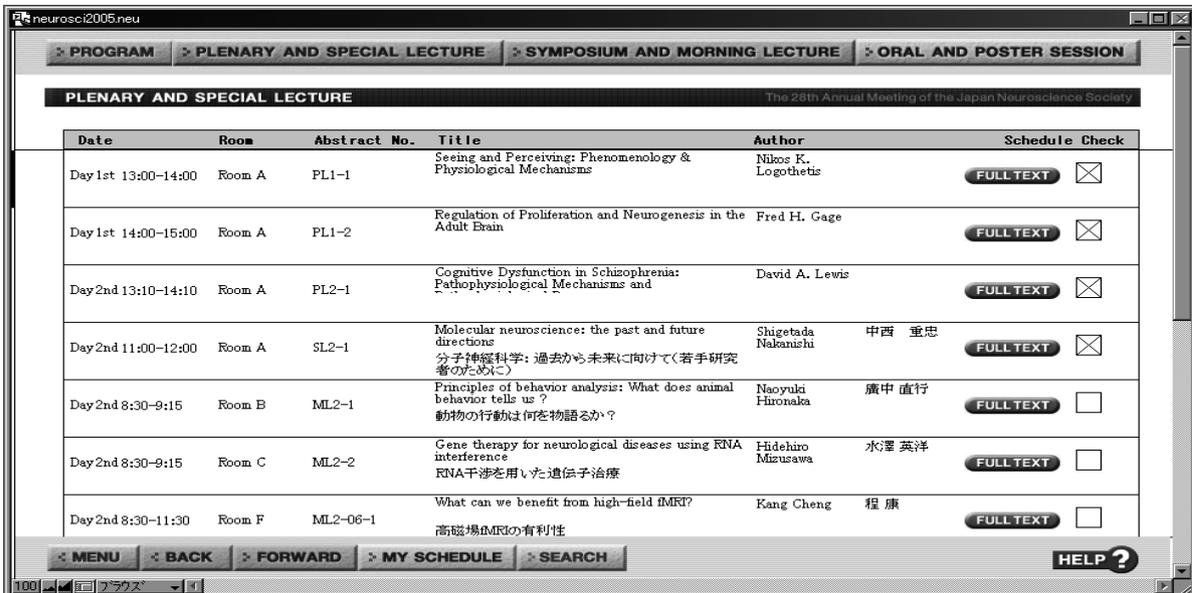
対応しておりますOSはWindows 98SE/2000/XPおよびMacOS 9以上です。まずCD-ROMをドライブに挿入し、インストーラを起動し、コンピュータにインストールをしてください。右頁の図にもありますように全体メニュー(メイン画面)は、種別ごとの演題リスト表示へのリンクとなっています。また日程表の各セッションをクリックするとそのセッションの演題一覧がリスト表示されます。この演題のリスト表示画面では、右側にあるチェックボックスをチェックすることによって、ご自身のスケジュールを作成することができます。チェック済みの演題を確認するには、"My Schedule"をクリックしてください。図に示したような個人スケジュール表が表示されます。このスケジュール表は印刷することも可能です。

今回の抄録ビューワの開発に際しては、2004年神経科学大会参加者の方々にお答えいただいたアンケート、さらに有志の方々によるユーザビリティテストなどの結果を参考にさせていただきました。しかし、開発の都合上、どうしてもあきらめなければならない機能、仕様もありました。おそらく印刷機能、検索機能、個人スケジュール機能、画面デザインなどに不満をお持ちになる方ができると予想しています。また十分な動作テストをしたつもりですが、基本機能に欠陥があるかもしれません。使用上もし不満な点等がございましたら、お手数でもぜひ大会事務局(neurosci2005@congre.co.jp)までご連絡いただければと思います。皆様の意見・批判が今後の抄録ビューワをより良くします!

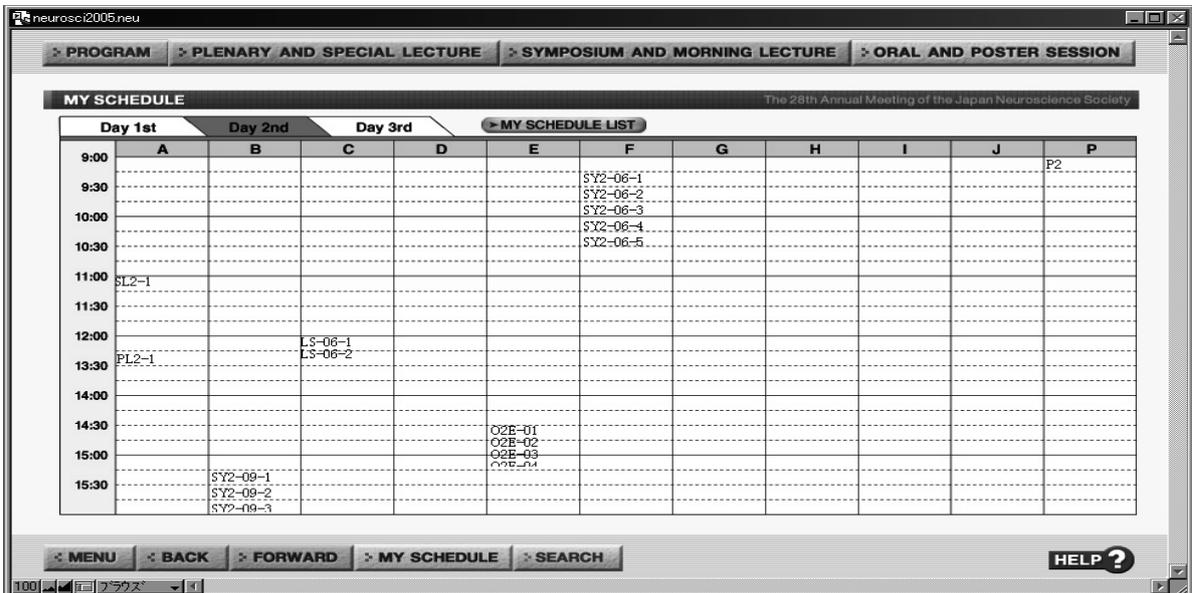
第28回(2005)日本神経科学大会
執行幹事 地村弘二(東京大学医学部)



メイン画面



演題のリスト表示



個人スケジュール表

研究者を妻にもって

名古屋大学大学院理学研究科
小田洋一

2005年5月18～20日、仙台で開催された第82回日本生理学会大会の3日目に企画された「男女共同参画推進委員会シンポジウム」(オーガナイザー:水村和枝 名大)の演者の一人として発表いたしました。シンポジウムではまず「日本における女性研究者のルーツ」と題して、並木和子先生(椛山女学園大学名誉教授)が1913年東北大学で誕生した日本初の女学生である丹下ウメさんや黒田チカさんを紹介され、彼女らとそれに続く辻本みちよさん、浅居ちかさん、加藤セチさんらが理化学研究所で活躍されたお話をされました。大学入学を志した当時の女学生達および文部省を説得して受け入れに至るまでの東北大学総長らの奮闘努力は、歴史小説を聞くようでありました。続いて、山本蒔子先生(東北大)が、東北大学の内科に勤められながらご自身で保育園を設立されるまでのご苦労の過程をお話になられました。お二人の迫力あるお話のあとで、私(名大)と山本章先生(旭川医大)は「男女共同参画の今 - 女性研究者を女房にもって - 」というタイトルを与えられて、共稼ぎの研究者がそれぞれどうやりくりしてきたかをお話しました。「どう」と問われて一般論を展開するよりはと思い、赤裸々に私生活をご披露することになりました。

まず、我が夫婦の自己紹介も兼ねて、私と妻(小田・望月紀子)の職歴を並べて紹介いたしました。私のほうは入学以来30年以上も大阪大学におり、ポストも助手・講師・助教授の職名が変わったほかは、本年1月に名古屋大学に移るまで非流動的であったの対し、妻はポスドクで三菱化成生命研に行き、科学技術振興事業団・大阪バイオサイエンス研・松下電器・NEDOなど数年ごとに職場が変わり、それに伴って研究テーマも変わりました。現在は立命館大学COEの特任教授のポジションについていますが、それとて任期がありいまだに不安がつきまといまいます。妻の研究歴は今の日本の女性研究者の一つの典型であろうと思います。そのような配偶者と暮らして考えさせられることは、もし自分が女性に生まれたら「研究者になっていたか?」「結婚しても研

究を続けていただけるか?」「子供を持っても研究を続けていただけるか?」で、これらに対する自分の答えは「Yes」「Yes」?(難しいだろう)です。おそらく私達だけでなく多くの方が、「子供の養育と夫婦の研究の両立」に困難を感じていられるでしょう。

そこで私の場合、どう乗り切ってきたかを家事・育児を夫婦がどのように分担して行ってきたかをお話しました(まさに私生活そのものなので、ここでは控えさせていただきますが、「生理学女性研究者の会」のニュースレターとホームページに掲載されるそうです)。家庭内の仕事の分担は50:50を目標として自分なりに努力をしたつもりではありますが、いまだに目標を達してはおりません。家事・育児のなかでの最大の問題は、子供が小さいときの病気。我が家の二人の子供は0歳から保育園で育ちましたが、それぞれ年間40日近く病気で休み、そのたびに病気の子供を誰が看るか大変な問題でした。最初は遠方に住む我々の母親に来てもらいましたが、最初の数年で負担の限界になりました。次はベビーシッターに頼みましたが、信頼のおける方は引っ張りだこで、ついお願いできなくなりました。最終的には夫婦で時間差出勤してきりぬけました。早朝から夕方までと夕方から明け方までに勤務時間を分け、仕事と看病を交代しました(多くは私が遅番)。それぞれの職場には多大のご迷惑をおかけしましたが、幸いにもなんとかご理解とご協力を得られて仕事を続けることが出来ました。確かにこの時代が一番苦しいのですが、私達の恩師である大沢文夫先生(阪大名大名誉教授)の「子供が出来たら最初の10年は開店休業でも続けることが大切」というお言葉通りで、子供が小学校に上がると大分楽になるのを実感しました。

最後に「妻であり母である女性研究者に何が必要か?」に関して私自身の考えを述べました。必要なのは「理解」と「機会」で、理解は「夫の理解、家族の理解」、「夫婦の上司と職場の理解」および「社会の理解」をあげました。「機会」に関してはもちろん機会の均等で、研究機関における女性のポストと学会など研究活動における女性の参画について意見を述べました。ポストに関しては、現在の大学教官における女性の割合が示すように、日本の大学に女学生第1号が誕生した時代からどれほど進歩したのか疑問に思っています。他方、研究活動においてはもっと女性が前に出る必要を訴えました。海外の学会に出かければ、女性のオーガナイザーがシンポジウムで座長を務めているのをごく自然に見受けま

すが、わが国ではとてもまれ。神経科学学会をはじめ多くの学会で公募シンポジウムが定着していますし、シンポジウムの企画と発表は、研究者の意欲で実現できることから、それぞれ男女の区別なく学会を引っ張っていく可能性と責任があるように思いますと述べました(毎年12月に生理研で開催される「シナプス研究会」は、女性オーガナイザーとスピーカーを入れることを原則としています)。

今回の発表を準備するに当たり、我が家の24年間を省みることが出来ました。私の発表に対して「そんなことはやめておいたほうがいいんじゃないの?」「私はとても引き受けられないなあ」という同性の意見や、陰で何か言われているだろうとも想像しますが、それらにとらわれずに自分ではさばさばとお話できました。学会最終日の午後にもかかわらず、多くの女性研究者のほか金子章道生理学会会長、久場健司先生、白尾智明先生、佐藤宏道先生をはじめ男性研究者の方々にも聞いていただきましたことを大変うれしく思いました。常にジェンダー問題は簡単に解決される問題ではなく、それぞれの時代背景において十分議論されるべきでしょう。「男女共同参画推進委員会シンポジウム」に初めて参加して女性研究者誕生の頃のお話も伺い、今こそこの問題に真正面から臨むべきではないかと考えながら、会場を後にしました。

女性会員比率からみる日本神経科学学会における男女共同参画

男女共同参画学協会連絡会委員
総合研究大学院大学国立遺伝学研究所
平田 たつみ

現在、内閣府により男女共同参画基本計画の改訂作業が進められています。長期にわたる経済活動の低迷や、急速に進む少子高齢化など、現行の基本法制定時には想定されていなかった日本の状況変化に柔軟に対応することで、さらなる男女共同参画社会の実現に向けた新たな一歩となると期待されています。次期基本計画の方向性についてはすでにホームページ等(<http://www.gender.go.jp/info/chukanseiri-index.html>)で公表されておりますが、ここで注目すべき点は、新たな取り組みを必要とする分野の筆頭に

「科学技術」があげられていることです。我が国の女性研究者の割合は研究者全体の11.6%とされており、増加傾向にはあるものの、欧米の女性研究者比率20-35%からは大きく水をあけられています(平成17年度版男女共同参画白書より)。今後の少子化に伴い、研究者・技術者の不足が深刻化する中で、女性研究者の参画に期待の目が向けられるのは当然のことであると思われます。また男女を問わず多様な個性の参加は、継続的な科学・技術の発展のためにも有効であると考えられます。時を同じくして改訂が進行中の科学技術基本計画においても、人材の育成と確保に重点が置かれ、女性研究者の活躍の促進が重要方針の一つとして打ち出されるといわれております。

日本神経科学学会は、昨年末、男女共同参画学協会連絡会(<http://annex.jsap.or.jp/renrakukai/> 以下連絡会と省略)に加盟し、男女共同参画に対する取り組みを本格的に開始いたしました。連絡会とは、2002年7月に発足した理工学系学協会をつくるネットワークで、科学技術の分野において男女がともに個性と能力を發揮できる環境づくりを目指して活動しております。現在25の正式加盟学協会と20のオブザーバー加盟学協会で構成されており、2003年に当連絡会が行った大がかりな科学技術系専門職実態アンケート調査をご記憶の方も多いことと思います。

このたび連絡会で学協会ごとの女性会員比率の調査が行われました。この調査で特に注目していただいたのは、一般会員と学生会員との間で女性比率がどの程度違うのかという点です。学生会員を「この専門分野を学ぼうと志した人」、一般会員を「この分野で研究活動をする何らかの職を得ることができた人」ととらえて、その中の女性比率を比較することで、どれだけ研究技術職の門戸が女性に対して開かれているのかを探ろうとしたともいえます。大学等の研究者の現状として、大学院生のうちは女性比率が比較的高いが、ポストドク、助手、講師、助教授、教授と職層が上がるにつれて如実に下がることが示されていますので、その差の研究分野間での比較を目指したわけです。結果を表1に示しますが、この調査に協力した学協会の中で、日本神経科学学会は、なんと!日本女性科学者の会に次いで“学生会員と一般会員における女性比率の差が小さい学協会”であるということが示されました。(日本女性科学者の会は全構成員の90%以上を女性が占める少し特殊な団体ですので、日本神経科学学会が最も学生会員と一般会員との落差が無い

学協会名	一般会員			学生会員			学生/一般 女性比率	調査年月日
	人数	女性数	女性比率	人数	女性数	女性比率		
日本女性科学者の会	341	321	94.1%	6	6	100.0%	1.06	2005.3.31
日本神経科学学会	3,999	524	13.1%	562	107	19.0%	1.45	2005.6.1
日本分子生物学会	9,529	1,839	19.3%	5,939	1,823	30.7%	1.59	2005.3.1
日本解剖学会*	1,820	156	8.6%	382	55	14.4%	1.68	-
日本生理学会	2,891	448	15.5%	278	75	27.0%	1.74	2005.5.31
日本生物物理学会	2,470	259	10.5%	980	183	18.7%	1.78	2005.5.31
日本細胞生物学会	1,250	225	18.0%	364	118	32.4%	1.80	2005.3.31
日本薬学会*	17,833	3,691	20.7%	3,254	1,220	37.5%	1.81	2005.6.2
応用物理学会	20,239	733	3.6%	3,511	231	6.6%	1.82	2005.6.14
日本育種学会*	1,523	185	12.1%	361	81	22.4%	1.85	2003.7.31
日本ウイルス学会*	2,148	384	17.9%	438	149	34.0%	1.90	2005.3.31
日本数学会	5,045	252	5.0%	418	40	9.6%	1.92	2003.4.1
日本バイオイメージング学会	301	36	12.0%	71	17	23.9%	2.00	2005.5.30
日本生化学会	9,327	1,632	17.5%	1,625	575	35.4%	2.02	2005.6.1
植物生理学会	1,695	265	15.6%	495	157	31.7%	2.03	2005.6.15
日本比較内分泌学会	394	46	11.7%	41	10	24.4%	2.09	2005.5.28
日本データベース学会	425	31	7.3%	400	64	16.0%	2.19	-
日本天文学会	1,612	161	10.0%	237	52	21.9%	2.20	2005.5.30
電気化学会	2,971	131	4.4%	842	82	9.7%	2.21	2005.5.31
日本動物学会	1,558	266	17.1%	538	207	38.5%	2.25	2005.5.30
日本原子力学会	6,646	146	2.2%	301	15	5.0%	2.27	2005.5.20
日本物理学会	15,689	627	4.0%	2,470	232	9.4%	2.35	2005.6.1
化学会	26,055	2,002	7.7%	5,639	1,053	18.7%	2.43	-
応用磁気学会	2,258	45	2.0%	491	25	5.1%	2.55	2005.5.30
日本生態学会	2,870	356	12.4%	855	294	34.4%	2.77	2005.5.30
蛋白質科学会	933	90	9.6%	336	90	26.8%	2.78	2005.06
日本植物学会	1,587	239	15.1%	381	164	43.0%	2.86	2005.5.31
建築学会	35,107	3,967	11.3%	318	103	32.4%	2.87	2005.5.31
機械学会	33,436	355	1.1%	4,602	165	3.6%	3.38	2005.05
日本金属学会	5,754	126	2.2%	1,328	99	7.5%	3.40	2005.2.28
電子情報通信学会	31,158	685	2.2%	3,215	241	7.5%	3.41	2005.5.31
地球電磁気・地球惑星圏学会	653	42	6.4%	59	13	22.0%	3.43	2005.5.30
高分子学会	9,437	521	5.5%	2,118	421	19.9%	3.60	2005.3.31
日本森林学会	1,998	165	8.3%	620	211	34.0%	4.12	2005.3.31
自動車技術会	36,822	291	0.8%	1,757	59	3.4%	4.25	-
精密工学会	5,121	58	1.1%	528	30	5.7%	5.02	2005.5.30
日本原生動物学会*	157	11	7.0%	59	21	35.6%	5.08	2005.6.1
化学工学会	7,360	235	3.2%	1,160	189	16.3%	5.10	2005.5.31
土木学会	33,887	507	1.5%	6,148	487	7.9%	5.29	2004.12.31
映像情報メディア学会	5,455	92	1.7%	142	18	12.7%	7.52	2005.4.30
地盤工学会	9,933	128	1.3%	764	74	9.7%	7.52	2005.4.30
日本鉄鋼協会	8,263	74	0.9%	334	30	9.0%	10.03	2005.3.31

表1 学会ごとの女性会員の比率

2005年6月男女共同参画学協会連絡会の調査資料から改変。各学会の最新データにおける一般会員ならびに学生会員の総人数、女性数、女性比率を示す。学生会員と一般会員における女性比率の比を取り(学生/一般 女性比率)、順に並べた。*印は連絡会には加盟していないがデータを提供していただいた学会を示す。

学会であったといっても差し支えないかもしれません。)

注意深くこのデータを見ていただければすぐに気づかれると思いますが、この結果の理由の一つとして、神経科学学会の学生会員の女性比率が低いことが考えられます。生物系の学会では、学生会員の女性比率は軒並み30%前後ですので、それに比べると神経科学学会の19.0%はかなり低めです。特に最近4年間の学生会員女性比率の伸びには頭打ちの傾向が見られますので(表2)、神経科学のおもしろさをもっと積極的にアピールするなど、より多くの優秀な女子学生をこの分野に引き込む努力が必要かもしれません。いずれにしましても、一般会員の女性比率はここ数年間順調に増加していますし(表2)、今後も学生会員と一般会員との落差のない傾向を保ったまま推移してゆくことさえできれば、理想的な男女共同参画が達成できると期待できます。

最近、行き過ぎたジェンダーフリーと叩かれる事多い男女共同参画活動ですが、男女にかかわらず個人の能力を最大限に発揮することに異議を唱える人はいないと思います。また、眠っている女性の能力に対して、もったいないと感じているのも私だけではないと思います。女性比率の細かな数値に一喜一憂するむなし時代は早く終わりにしたいと願いつつも、我々の学会の健全性が示されたのは喜ばしい事だと思いご報告申し上げます。

資料提供ならびに記事に対する助言をいただきました東京大学 伊藤啓、大坪久子両氏と連絡会の皆様に感謝致します。

調査日	一般会員			学生会員		
	総数	女性数	女性比率	総数	女性数	女性比率
1997年9月	2,496	255	10.2%	389	49	12.6%
2001年9月	3,404	412	12.1%	474	89	18.8%
2005年6月	3,999	524	13.1%	562	107	19.0%

表2 神経科学学会における女性会員数、比率の年別推移

男女共同参画に関するご意見・問い合わせは平田たつみ(tathirat@lab.nig.ac.jp)までお願いいたします。

第31回国立大学法人動物実験施設協議会に参加して

蔵田 潔

(弘前大学医学部附属動物実験施設長、日本神経科学学会動物実験倫理委員会委員)

第31回国立大学法人動物実験施設協議会(国動協)総会が平成17年5月27日に広島大学の主管で開催された。例年どおり、総会に先立ち、前日の5月26日に「動物実験センターにおける生殖・発生工学技術の現状と展望」と題されたサテライトミーティングが、また総会当日の午前中には「動物実験の社会的理解」をめぐって」と題された施設長・教員・技術職員・事務職員合同懇談会が開催された。今回の一連の会は、各大学と研究者が直面するさまざまな重要問題の提起と討論の場になったことで、いずれも極めて意義深いものであった。以下にそれらの概要を報告したい。

1. 総会

総会では国動協の各ワーキンググループの活動報告、および文科省機関課係長による動物実験施設を含めた国立大学に対する行政側の考え方が示された。後者では、各大学における予算・スペースの裁量性の拡大を図ることにより、それぞれが期待される役割を軸に、各法人との違いをどのように打ち出すかが重要であり、研究支援施設も例外ではないことが述べられていたが、最近公表された科学技術・学術審議会による第3期科学技術基本計画の重要政策(中間とりまとめ)を裏打ちする内容であったと思われる。

現在、動物実験をとりまく問題点に関する論議という点では、総会よりむしろサテライトミーティングと合同懇談会の一連の講演が極めて興味深かったので、以下に重点的に記載する。

2. 合同懇談会

合同懇談会は「動物実験の社会的理解」をめぐって」をテーマとし、熊本大学生命資源研究・支援センターの浦野徹氏による「動物の愛護及び管理に関する法律の改正」、自然科学研究機構生理学研究所の鍵山直子氏による「日本学術会議第7部提言の具体化」、大分大学総合科学研究支援センターの仁木一郎氏による「情報開

示に関する行政裁判」と題する講演が行われた。

これらの中で浦野氏と鍵山氏の講演を紹介したい。まず、浦野氏が強調していたことは二点ある。第一に、3R(Replacement, Reduction, Refinement)の理念を導入すること、第二に、動物実験に関しては各研究機関での自主管理によるのであり、法によって規制されるべきではないとすることである。また、法改正にあたっては日本神経科学学会や日本生理学会をはじめとする学会からの提言が重要な役割を果たしたことが紹介されていた。動物愛護管理法の一部を改正する法律は、すでに平成17年6月22日に公布されているが、これらの考え方が改正法に盛り込まれている。これまでの法律では「できる限りその動物に苦痛を与えない方法」と規定されていたものが、改正法では「科学上の利用の目的を達することができる範囲において、できる限り動物を供する方法に代わり得るものを利用すること、できる限りその利用に供される動物の数を少なくすること等により動物を適切に利用することに配慮するものとする」ことが加えられている。これをもって、これまで法的に曖昧であった実験動物を用いた動物実験が認知されたものと考えられ、非常に意義深い改正であったと考えられる。

続いて鍵山直子氏が日本における動物実験に関する自主規制のあり方を講演された。この中で、鍵山氏は、わが国には全国統一の動物実験ガイドラインがなく、規定等をそれぞれの研究機関が個別に定めているため、自主管理の具体的な基準が社会から見えにくいこと、各研究機関による自主管理の客観性と透明性を評価検証する仕組みがないため、動物実験が適正に管理されているかどうかが見えにくいことの二点を強調された。この問題をクリアーするためには、全国で統一された動物実験ガイドラインを制定すること、ガイドラインの実効を担保する第三者評価システムの構築(研究機関への指導)が必要であること、さらに、もし5年後に評価が機能していなければ社会から見切りをつけられてしまうので、今が正念場であると訴えられた。この目的達成のためには、統一ガイドラインの準拠と学内規定等の遵守、ピアレビューによる検証と社会的透明化の促進、一般市民や学徒への啓蒙活動、および動物実験に理解を示す愛護団体との協働などに研究者自らが力を注ぐことが必要である。もしこれをしなければ、許認可制、原則終生飼育、虐待の定義強化など、動物実験に対するさまざまな規制がかかること

が懸念されるからである。

3. サテライトミーティング

サテライトミーティングは「動物実験センターにおける生殖・発生工学技術の現状と展望」と題され、京都大学院医学研究科附属動物実験施設の芹川忠夫氏が「ナショナルバイオリソースプロジェクト(NBRP)ラットについて」、鹿児島大学フロンティアサイエンス研究推進センターの高尾尊身氏が「ミニプタの使用・供給状況について」、滋賀医科大学動物生命科学研究センターの鳥居隆三氏が「サル類の利用とES細胞について」、そして広島大学自然科学研究支援開発センターの外丸祐介氏が「クローン技術の応用について」という演題で講演された。

これらの中では、鳥居隆三氏の講演が、実験用サルの繁殖と、それによって研究機関の特徴を明確に打ち出しているという点で、特に興味深かった。すなわち、捕獲された個体には感染の問題や、特にES細胞に関する実験では遺伝学的統御がなされていないことに起因する再現性の低さの問題などがあることから、滋賀医大では発生工学的手法の活用によるカニクイザルのSPF(specific pathogen-free)個体を繁殖することを当初の目的とした。一方、サルを用いた実験には大きな倫理的問題が生じうるので、動物実験を行う研究者に対し、実験内容の審査のみならず、動物実験資格認定制度を導入してきた。これらを背景にして、滋賀医大動物生命科学研究センターは、その中期目標・自己評価として、他大学と比較して特徴ある施設であること、再生医療という重要な科学政策と合致していること、具体的な成果があがること、共同研究、特に産学連携ができる魅力ある研究を行うことなどを柱とした計画が立てられ、それらの多くがすでに達成されている。この事例は、現在の大学が求められているひとつの雛型として我々が学ぶべき点であろう。

第82回日本生理学会大会 日本神経回路学会 連携シンポジウムに参加して

東京大学医科学研究所基礎医科学部門
神経ネットワーク分野
新里和恵

平成17年5月18日から5月20日まで仙台国際センターで第82回日本生理学会大会が開催され、大会中の企画シンポジウム、日本神経回路学会連携シンポジウム「海馬のダイナミック表現」に出席しました。塚田稔先生、津田一郎先生、林初男先生、西条寿夫先生の4名によるセッションでしたが、2題ずつ前半と後半に分けて行われました。前半2題は塚田先生、津田先生からシナプス入力の時・空間パターン、言い換えると、どこのシナプスにどのようなタイミングで入力があったかを表現する時・空間マッピングについて、シュミレーションとスライス標本を用いた *in vitro* の実験を交えてのお話が展開されました。後半2題は細胞集団の発火パターン時系列処理の観点から、エピソード記憶の神経機構について、計算モデルと *in vivo* での実験が林先生、西条先生から紹介されました。時・空間的に様々なパターンを持つ個々のシナプス入力は、細胞体で統合されて1ニューロンの出力として表現されます。さらにこのニューロンの活動は、ネットワーク内で集団として適切に機能することで、記憶・学習の形成を実現しています。このように脳の機能研究において、その機構を理解するためには、シナプスやニューロンといった細胞レベルから細胞集団、個体レベルまで全ての機構をつながりの過程として理解する必要があります。現時点では、生理実験やモデルを用いた研究のそれぞれに利点があり、総合的なアプローチがないものかと日々考えていました。今回のこのシンポジウムでは、全体を通して *in vitro* / *in vivo* の生理実験と計算理論を駆使した講演で、たいへん充実した内容でした。また日頃生理実験に慣れ親しんでいる私のような立場でも、計算理論の説明も明解で分かり易く、演者のご配慮を感じました。様々な時・空間パターンを持つシナプス入力やニューロン集団の挙動を解析する際に、生理実験と計算理論との連携はますます必要かつ有効になると思われ、今後これら各分野の融合により、新たな研究成果が生まれることを期待させる講演でした。

電子メールによる お知らせについて

電子媒体を用いた会員へのお知らせについて、神経科学ニュース3月号では、会員情報の登録や変更、会員へのメールによるお知らせの送付をUMINのシステムを用いて行う旨のご案内をいたしましたが、その後、ホームページ編集小委員会と電子化推進委員会が合同で協議しました結果、これまでのUMINのシステムでは学会関連事務などの電子化を満足できるレベルまで改善することができないという結論に達し、ホームページを大幅にリニューアルするのに合わせて(神経科学ニュース5月号参照)、ホームページ編集小委員会との密接な協力のもとに独自のシステムを立ち上げ、会員情報の登録、保持、更新やお知らせの電子メールでの送信ができるようになる方針となりました。将来的には、このシステムを使った選挙の投票や会費納入の電子化も実現できるように進めていく予定です。システムの立ち上げには、まだかなり時間がかかるものと思われそうですが、学会運営の効率化や会員サービスの向上につながる方針の変更ですので、会員の皆様方のご理解とご協力をお願い申し上げます。

電子化推進委員会 委員長
真鍋俊也

ホームページのリニューアル について(第2報)

前回ご連絡しましたように、ホームページ編集小委員会を中心として、日本神経科学学会のホームページをリニューアルしています。第一段階として、6月1日よりユーザーインターフェースが刷新されました。またホームページのメンテナンスは信頼できる外部業者に一部業務を委託することになりました。まだご覧になっていない方は、是非訪れて(<http://www.jnss.org/index.html>)、ご感想・ご要望をお聞かせ願えると幸いです。

今回のリニューアルに伴い、一部の機関では、日本神経科学学会のホームページが非常に重たくなるという現象が報告されています。この原因はよ

くわかっていませんが、取り敢えずの対策として、ロードに時間がかかるときにはブラウザの移動 (Go) ボタンを何回か押して見てください。

今後の予定としては以下の通りです。

1. レンタルサーバーの移行

これは、今後認証システムや会員データベースを整備するために必要です。混乱を避けるために、第28回日本神経科学大会終了後を予定しています。サーバー移行後は、アクセス速度などもより快適になる予定です。サーバーの移行によるドメイン名(アドレス)の変更はありません。

2. 認証システム・会員データベースの整備
会員のみを対象とした情報を掲載するために、これまで一部 UMIN のサーバーを利用していましたが、独自の認証システムを立ち上げる予定です。このために、会員名のデータベースを整備します。このデータベースを用いて、例えば北米神経科学学会のように、会員の所属研究機関・電話・Fax・E-mail アドレスを Web ページよりサーチできるようになる予定です。多くの学会でも似たような試みはされていますが、データベース上のデータの確認作業がネックとなって、なかなかうまくいかない例が多いようです。是非会員の皆様のご協力をよろしくお願いいたします。

3. 電子メール通知システムの構築

希望者に対する電子メールによる同時一斉通知システムを構築します。

4. 電子投票システムの構築

電子化問題委員会と協力して電子投票システムを構築します。

まだまだ途上ですが、是非、「こんな内容がほしい」「あんな機能がほしい」といった希望など皆様のご意見をホームページ編集小委員会までお聞かせください。また、ホームページのリンク先に登録ご希望の方もご連絡ください。

ホームページ編集小委員会 柚崎
(myuzaki@sc.itc.keio.ac.jp)

INFORMATION

シンポジウム・研究会



第7回ペプチド
フォーラム
膜透過ペプチド:
細胞との相互作用
と蛋白質・薬物
デリバリーへの応用

日時 平成17年8月4日(木)10:30 ~ 17:10
会場 京都大学大学院薬学研究科 24 番講義室
(京都市左京区吉田下阿達町 46-29、<http://www.pharm.kyoto-u.ac.jp/index.html>)
主催 日本ペプチド学会
共催 日本薬学会・他
オーガナイザー (京大化研)二木史朗、(京大院薬)松崎勝巳
膜透過ペプチドの発見と研究の展開(京大化研)二木史朗
タンパク質セラピー法の高機能化と治療への応用(岡山大医)松井秀樹
膜透過性ペプチド PTD-QBP1 を用いた神経変性疾患ポリグルタミン病に対する分子治療(阪大医)永井義隆
蛋白導入システムの豚島移植への応用(京大病院)野口洋文
細胞死抑制活性強化蛋白質 FNK を用いた蛋白質導入治療法の開発(日本医大)太田成男
癌免疫療法を目指した膜透過ペプチド融合タンパク質発現ベクターの開発(京大院薬)高倉喜信
TAT-Protein A による特定タンパク質の細胞内導入法の開発(東工大院生命理工)小島英理
抗菌性ペプチドの膜透過機構(京大院薬)松崎勝巳
核酸 / ポリカチオン相互作用におけるカチオン種の効果(九大先端研)丸山 厚
オリゴアルギニン修飾による薬物の経粘膜透過性の改善(京都薬大)山本 昌

オクタアルギニン修飾リポソームの細胞内取り込みと細胞内輸送機構(北大院薬)原島秀吉
オリゴアルギニン修飾ベクターにおけるアルギニン鎖長の遺伝子導入効率への影響(星薬大)米谷芳枝
マルチファンクショナル人工ベクターを用いる遺伝子デリバリー(阪市大院工)長崎健
参加費 無料(定員 80 名)
申込・問合せ先
〒611-0011 宇治市五ヶ庄 京都大学化学研究所 二木史朗
Tel (0774)38-3210/3211 Fax (0774)-32-3038 E-mail:futaki@scl.kyoto-u.ac.jp
<http://www.scl.kyoto-u.ac.jp/bfcd/forum.html>



第35回(2005)
新潟神経学
夏期セミナー

期日:8月4日(木)~6日(土)
場所:新潟大学脳研究所 統合脳機能研究センター(6F)セミナーホール
主催:新潟大学脳研究所 新潟脳神経研究会
プログラム
8/4(木)
9:00 ~ 12:00 部門見学(詳細は下記)
13:00 ~ 19:00 たんぱく質分解の破綻と神経疾患司会:田中啓二
13:00-14:00 たんぱく質分解:オーバービュー / 田中啓二(都臨床研)
14:00-15:00 ユビキチン代謝異常と神経変性 / 和田圭司(精神・神経センター)
15:00-16:00 ポリグルタミン病の分子構造病態 / 貫名信行(理研・脳センター)
16:00-17:00 E4 による神経変性の防御 / 中山敬一(九大・生医研)

17:00-18:00 パーキンソン病と蛋白質分解異常 / 高橋良輔(京大・医)

18:00-19:00 A 代謝とアルツハイマー病 / 西道隆臣(理研・脳センター)

8/5(金)

9:00 ~ 12:00 部門見学(詳細は下記)

13:00 ~ 14:30 神経系における糖鎖シグナル / 川崎敏祐(京大・薬)

14:40 ~ 16:10 シナプス可塑性と神経情報伝達 / 尾藤晴彦(東大・医 / 新大・脳研)

16:20 ~ 17:50 知性の神経生物学 / 入来篤史(医歯大 / 理研・脳センター)

18:00 ~ 懇親会

8/6(土)

9:00 ~ 12:00 新しい治療戦略:脳腫瘍(グリオーマ) 司会:田中隆一

9:00-10:00 ハイパーサーミア / 田中隆一(新潟大・脳研)

10:00-11:00 免疫細胞・ペプチド・分子治療 / 山中龍也(新潟大・脳研)

11:00-12:00 遺伝子・分子・細胞治療 / 吉田 純(名大・医)

13:00 ~ 16:00 新しい治療戦略:神経疾患 司会:西沢正豊(新潟大・脳研)

13:00-14:00 パーキンソン病の遺伝子治療 / 村松慎一(自治医大)

14:00-15:00 運動ニューロン疾患の分子標的治療 / 祖父江 元(名大・医)

15:00-16:00 自己免疫性疾患の治療戦略 / 三宅幸子(精神・神経センター)

部門見学プログラム

8/4(木)

分子神経生物学 (10:00-12:00) ニューロンの初代培養と遺伝子導入; イントロと実験見学(6名)

細胞神経生物学 (9:30-12:00) コンディショナルターゲットイング (5名)

システム脳生理学 (10:00-12:00) 大脳聴覚野機能の行動解析 (8名)

病理学 (9:30-12:00) Brain Cutting:自分の目で病変を見つけてみよう (10名)

分子神経病理学 (10:00-12:00) PCR法によるDNA合成実習、研究紹介 (8名)

脳神経外科学 (9:30-12:00) 手術見学 (5名)

神経内科学 (9:00-12:00) 病棟回診

(白衣持参のこと) (10名)

統合脳機能研 (10:00-12:00) ヒト脳機能を見る:fMRI (10名)

遺伝子実験 (10:00-12:00) アルツハイマー病感受性遺伝子探索の現場 (5名)

動物資源開発 (9:00-12:00) マウス胚の操作:体外受精 (3名)

8/5(金)

分子神経生物学 (10:00-12:00) ニューロンの初代培養と遺伝子導入; 実験見学(続)(6名)

細胞神経生物学 (9:30-12:00) 記憶・学習メカニズムの解析法 (5名)

システム脳生理学 (10:00-12:00) 脳活動のイメージング:実験公開(8名)

病理学(9:30-12:00) 組織検討会(標本の見方と鑑別診断)、教室紹介 (10名)

分子神経病理学 (10:00-12:00) PCR法によるDNA合成実習、研究紹介(続) (8名)

脳外科・神経内科(10:00-12:00) 神経放射線カンファレンス (15名)

統合脳機能研(10:00-12:00) ヒト脳機能を見る:事象関連電位 (5名)

遺伝子実験 (10:00-12:00) アルツハイマー病感受性遺伝子探索の現場 (5名)

動物資源開発 (9:00-12:00) マウス胚の操作:凍結保存(3名)

受講申込方法

受講料(一般 10,000円、院生 5,000円、学生 2,000円)を郵便局備付の振替用紙を用いて「口座番号:00520-1-45943, 加入者名:新潟脳神経研究会」に振込んで下さい。その際、振替用紙の通信欄に、所属、連絡先を明記し、

・1日のみの受講希望者は日を指定し、上記の半額をお送り下さい。

・部門見学の希望者は希望部門名を記入して下さい。定員になり次第締め切ります。

問合先 〒951-8585 新潟市旭町通1-757 新潟大学脳研究所 神経学夏期セミナー事務局 (TEL: 025-227-0606, FAX: 025-227-0814, E-mail: blib@bri.niigata-u.ac.jp)

参加資格は問いませんが、学部卒後の若い研究者、医師、学生等を歓迎します。

本セミナーは、日本脳神経外科学会生涯教育クレジット、及び日本神経学会認定医更新取得単位の対象となります。



生理学若手 サマースクール 2005 実施要綱

テーマ

「情動・感情の生理学的理解」

開催日時

平成 17 年 8 月 7 日(日)～9 日(火)

開催場所

東京医科歯科大学 5 号館講堂(東京都文京区湯島)

参加資格

大学院生・学部学生・若手研究者(企業の研究者も含む)・その他

(生理学会会員である必要はありません)

申し込み方法

ホームページからの登録(6 月上旬開始予定)
(<http://physiol.cognitom.com>)からリンクされています。

アドバイザー

金子章道(日本生理学会会長、慶応義塾大学名誉教授、星城大学リハビリテーション学部教授)

泰羅雅登(日本大学総合科学研究所教授)

運営

主催 日本生理学会

後援 文部科学省特定領域研究「統合脳」5 領域

事務局・問い合わせ

玉川大学学術研究所脳科学研究施設脳イメージング部門内

松田哲也

(Tel&Fax) 042-739-8458

(E-mail) tetsuya@lab.tamagawa.ac.jp

【プログラム】(敬称略)

8 月 7 日(日)

10:00- 受付開始

10:30- 開講式

開講の挨拶 金子章道(日本生理学会会長・慶応義塾大学医学部名誉教授・星城大学教授)

11:00-12:30 Basic Course1

神経生理学の基礎:皆さんの質問にお答えして
泰羅雅登(日本大学総合科学研究所・教授)

13:30-15:30 Basic Course2

生理学の基礎:神経伝達と神経修飾
岡良隆(東京大学大学院理学系研究科生物科学専攻・教授)

16:00-18:00 Applied Course1

情動の分子イメージング

須原哲也(放射線医学総合研究所・特別上席研究員)

8 月 8 日(月)

10:00-12:00 Applied Course2

表情認知とその障害

河村満(昭和大学神経内科・教授)

13:30-15:30 Applied Course3

モノアミン神経伝達と情動

曾良一郎(東北大学大学院医学研究科精神神経生物学分野・教授)

16:00-18:00 Applied Course4

情動による身体状況の変化メカニズム(情動の自律神経出力)

桑木共之(千葉大学大学院医学研究院先端医学研究部門・教授)

8 月 9 日(火)

10:00-12:00 Applied Course5

遺伝子改変マウスを用いた情動・感情の研究
宮川剛(京都大学大学院先端領域融合医学研究機構生体遺伝子機能研究グループ・助教)

13:30-15:30 Applied Course6

情動と行動発現の神経機構

西条寿夫(富山医科薬科大学大学院医学系研究科システム情動科学・教授)

15:30-16:00

閉講式

薬理学サマーセミナー



2005 長崎

「痛み研究への誘い

- 研究戦略と方法論」

主催:(社)日本薬理学会 実行委員会:研究
推進委員会

プログラム作成責任者:植田弘師(長崎大院・
医歯薬・分子薬理)

仲田義啓(広島大院・医歯薬・薬効解析)

開催日時:2005年9月1日(木)~3日(土)

実施場所:長崎温泉やすらぎ伊王島

〒851-1201

長崎県長崎市伊王島町1丁目3277番地7

電話:095-898-2202 Fax:095-898-2204

交通機関はホームページを参照ください。

(http://www.ioujima.jp/index_f.html)

9月1日(木)午後2時より

仲田義啓(広島大) Overview

「痛み標的分子を知る」講演30分、討論20分

富永真琴(岡崎生理研) TRPチャンネルと痛み

川畑篤史(近畿大) PAR-2と痛み

谷内一彦(東北大) 痛み受容におけるヒスタミンの役割

特別講演

服部政治(大分医大) 日本における慢性疼痛
大規模調査

9月2日(金)午前9時より

「記憶される痛みを知る」講演30分、討論20分

田邊 勉(東京医歯大)カルシウムチャンネルと痛み

植田弘師(長崎大)脂質メディエーターと痛み

伊藤誠二(関西医大)脊髄NO産生と痛み

倉石 泰(富山医薬大)種々の神経因性疼痛モデル

特別講演

富安志郎(長崎市民病院) がん痛み -
臨床の立場から -

9月3日(土)午前9時より 正午まで

「痛みを知るアプローチ」パネルディスカッション形式

伊藤誠二(関西医大) 神経因性疼痛に關与

する生体因子のプロテオミクスと機能解析

井上和秀(九州大) 細胞・組織学的アプ

プローチ: ATPを例として

富永真琴(岡崎生理研)生理学的アプローチ

谷内一彦(東北大) ヒトにおける痒みと

痛みの非侵襲的機能イメージング研究

・募集参加人数:約60名(応募者が多い場合は調整させていただきます)

・対象:日本薬理学学会会員(非会員で参加希望される方は入会する必要があります)

・参加費:2万円(宿泊費、食費、懇親会費、乗船券に当てます)

なお、長崎での開催のため、参加学生の旅費を一部補助致します。

・申込・連絡先:「薬理学サマーセミナー

2005長崎事務局」井上 誠 宛

e-mail: minoue@net.nagasaki-u.ac.jp

電話: 095-819-2422 Fax: 095-819-2420



シンポジウムの

お知らせ

"Neuronal Differentiation in Cortical Development"

September 16 and 17, 2005

Icho-Kaikan, Osaka University, Suita city,
Osaka Japan

(大阪大学吹田キャンパス内銀杏会館)

Speakers:

Audinat, Etienne (INSERM, France)

Hevner, Robert (Univ of Washington, USA)

Macklis, Jeffrey (Harvard Medical School,
USA)

Molnár, Zoltán (University of Oxford, UK)

Murakami, Fujio (Osaka University, Japan)

Nakajima, Kazunori (Keio University, Japan)

Sakurai, Masaki (Teikyo University, Japan)

Sato, Makoto (University of Fukui, Japan)

Sur, Mriganka (MIT, USA)

Takumi, Toru (OBI, Japan)

Uemura, Tadashi (Kyoto University, Japan)

Yagi, Takeshi (Osaka University, Japan)
Yamamoto, Nobuhiko (Osaka University,
Japan)

The purpose of this meeting is to present recent findings and prospects concerning differentiation and specification of cerebral cortical neurons. The focus will be on the intrinsic and extrinsic regulatory mechanisms.

Pre-registration is necessary for all participants.

The detail for participation is shown in the following home page.

<http://www.fbs.osaka-u.ac.jp/neurobiol/ncdc/>

問い合わせ先

大阪大学大学院生命機能研究科
細胞分子神経生物学研究室
山本亘彦

Phone:06-6879-4636 Fax:06-6879-4637

Email: nobuhiko@fbs.osaka-u.ac.jp



第14回日本バイオ イメージング学会 学術集会

主催: 日本バイオイメージング学会

会期: 平成17年10月26日(水) ~ 28日(金)

会場: 東京大学農学部弥生講堂・一条ホール
(〒113-8657 東京都文京区弥生1-1-1)

大会長:

田之倉 優(東京大学大学院農学生命科学研究科教授)

副大会長:

山本 健二(国立国際医療センター研究所副所長)

菊地 和也(東京大学大学院薬学系研究科助教授)

【スケジュール】

10月26日(水)13:00 ~ 16:50

公開シンポジウム「たんぱく質のかたちと病
気」

10月27日(木) ~ 28日(金)

特別講演「水とイオンチャネルを中心とした
構造生理学研究」

一般講演・ポスター

シンポジウムI ~ IV

<シンポジウム題目>

「分子・オルガネラ・細胞イメージング」

「新規計測技術によるバイオイメージング」

「微細粒子製造・化工・操作技術とその生
命科学への展開」

「タンパク質のバイオイメージ」

詳細は大会ホームページをご覧ください

[http://www.nih.go.jp/yoken/bioimaging/
index-j.html](http://www.nih.go.jp/yoken/bioimaging/index-j.html)

【連絡先】

第14回日本バイオイメージング学会大会長
田之倉 優

〒113-8567 東京都文京区弥生1-1-1

東京大学大学院農学生命科学研究科 応用生
命化学専攻 食品工学研究室

Tel. 03-5841-5165 Fax. 03-5841-8023

E-mail: ayi@mail.ecc.u-tokyo.ac.jp



千里ライフサイエンス 技術講習会 第42回 「SNP、DNAチップ の最新技術と応用」

日時

平成17年11月4日(金)午後1時 ~ 5時

場所

千里ライフサイエンスセンタービル6階(展
示場)(地下鉄御堂筋線千里中央駅北口すぐ)

ねらい ゲノムデータが整備され、ゲノム解
析技術も新しい局面を迎えている。短期間に
全ゲノムのSNPを鳥瞰できるようになり、ま
たDNAチップも遺伝子発現解析以外の種々の
応用も可能になっている。本講習会ではこれら
の進歩をふまえ、両技術の基本から最新の応用
まで習得する。

コーディネータ 戸田達史 大阪大学大学院 医
学系研究科 臨床遺伝学 教授

プログラム

講義1: SNP解析の基礎と応用

講義 2:DNAチップによる解析と最新技術
 実習:実際の解析機器での講習とデータ解析
 講師:戸田達史 大阪大学大学院 医学系研究
 科 臨床遺伝学 教授

油谷浩幸 東京大学先端科学技術研究セン
 ター ゲノムサイエンス 教授

定員:30名

参加費:5,000円

申込方法:参加申し込みは以下の手順にした
 がって行ってください。

(1)氏名、勤務先、所属、役職名、〒、所在
 地、電話およびFAX番号を明記の上、郵便、
 FAXまたはE-mailで下記宛お申し込み下さ
 い。

(2)事務局より受付の通知を返送いたします
 ので、そこに記載した振込先口座に参加費
 をお振込みください。

(3)入金を確認後、通常1週間以内に領収書
 兼参加証をお届けいたします。

申込締切:平成17年9月30日(財団必着)但
 し、定員を超過した場合は参加者の調整を
 行う場合があります。

主催 財団法人千里ライフサイエンス振興財
 団

協賛 アフィメトリクス・ジャパン株式会
 社、アプライドバイオシステム

ズジャパン株式会社、株式会社千里ライフ
 サイエンスセンター

問合先 財団法人千里ライフサイエンス振
 興財団 技術講習会 G 42 係

〒560-0082 大阪府豊中市新千里東町1-4-2

千里ライフサイエンスセンタービル8階

TEL 06-6873-2001 FAX 06-6873-2002

E-mail tnb-lsf@senri-lc.co.jp

(注 lsf;エルエスエフ、lc;エルシー)

URL <http://www.senri-lc.co.jp>

研究助成



公募開始のお知らせ

財)ブレインサイエンス振興財団は、この
 たび下記の各助成について平成17年度の
 公募を開始しました。

塚原仲晃記念賞:締切り日=平成17年10月
 28日

研究助成:締切り日=平成17年10月28日

海外派遣研究助成:締切り日=平成18年
 1月13日

海外研究者招聘助成:締切り日=平成18
 年1月13日

詳細は財団ホームページをご覧ください。

URL: <http://homepage2.nifty.com/bsf/>

公 募



教員の公募について

職名および人員:助教授 1名

専門分野:神経科学およびその関連分野

応募要件:脳神経機能学研究室はニューロン・
 グリア局所神経回路網における情報処理過程
 の基本的原理を解明することを目指し、主に
 脳スライス標本や培養細胞を材料に光学的お
 よび電気生理学的な測定方法を用いた実験的
 観察、分子生物学的手法による実験材料や分
 子プローブの開発、シミュレーションによる
 局所回路モデルの開発等を進めています。こ
 の方向性を良く理解して研究を推進し、学部
 生および大学院生対象の教育および研究指導
 に情熱をもって従事していただける方を求め
 ます。

現在の研究室の構成:宮川博義教授、井上雅司
 助手、森田光洋助手

応募書類:(1)履歴書(写真貼付)、(2)研究業績リスト、(3)主要論文5編の別刷り(コピー可)、(4)これまでの研究概要(2000字程度)、(5)着任後の教育と研究に関する理念と抱負(2000字程度)、(6)応募者の所見を求めうる方2名の氏名および連絡先(場合によっては推薦状を依頼することがあります)、(7)その他、選考の参考となる資料(学会活動、研究費取得状況等)なお、選考過程においてセミナーを行っていただく場合があります。選考終了後に推薦状以外の書類の返却を希望される方は、返信用封筒(あて先記入、切手貼付)を同封して下さい。

応募期限:2005年8月15日(月)(必着)

着任予定日:2005年10月以降のなるべく早い時期

書類送付先:〒192-0392 東京都八王子市堀之内1432-1 東京

薬科大学生命科学部 学部長 山形秀夫(「脳神経機能学助教授選考応募書類在中」と朱書き、簡易書留にて郵送のこと。)

問合せ先:東京薬科大学生命科学部 宮川博義

Tel:0426-76-7164、電子メール:

miyakawa@ls.toyaku.ac.jp

ホームページ:<http://www.ls.toyaku.ac.jp/Life-Science/lcn-9/>



国立遺伝学研究所 新分野創造研究室 助教授公募

情報・システム研究機構 国立遺伝学研究所(以下、遺伝研)は、遺伝学の新しい分野を開拓することをその中期計画に含めています。その一環として今回、優れた研究を行っている若手研究者によって率いられる「新分野創造研究室」を2つ立ち上げ、PI(研究グループの長)の助教授2名を公募する事になりました。遺伝研には、最先端の機器、生物遺伝資源、データベースなど最高の研究環境が整っています。このような研究環境やリソースを最大限に利用して6年間(任期5年+再任1年)研究に集中し、良い

成果を上げてもらおうという企画です。各研究室に、独立の研究スペースとスタートアップ経費(これまでの実績700万円)、年間600万円の運転資金とポストク1人のポジションの提供を予定しています。総研大・遺伝学専攻の教員として大学院生の教育にも従事できます。遺伝研は研究者間の交流・議論が非常に活発なのが特徴です。生命科学の広い分野をカバーしているにもかかわらず、自分の専門以外の分野についても興味や関心を持つ人が多く、様々な分野の人から自分の研究に対する意見をもらうことが可能です。lab meeting, journal clubなどを複数の研究室合同で行ったり、研究室間の共同研究も活発に行われています。単に研究実績を挙げるだけでなく、研究者としてさらに成長するにも最高の環境でしょう。

詳細は以下のURLをご覧ください。

<http://www.nig.ac.jp/jimu/jinjiboshuu/>

応募〆切:2005年8月15日(月)必着

提出書類(電子メールでMS-Wordまたはpdfファイルを添付、詳細は上記URLに記載):

- (1)履歴書(英文・和文各1通、年号は西暦、Eメールアドレス記入)
- (2)学術論文、総説などの目録(主要論文の番号に 印を付してください。)
- (3)現在までの研究の概要と将来の方向・希望(英文A4紙2~3枚)
- (4)本人について評価できる研究者(日本人・外国人各2名)の氏名と連絡先
- (5)主要論文別刷

提出・問い合わせ先:

E-mail:nigjinji@lab.nig.ac.jp

郵送:〒411-8540 静岡県三島市谷田1111

情報・システム研究機構国立遺伝学研究所人事委員会(総務課人事係)

電話:055 (981) 6710(直通)

Fax:055 (981) 6715

ホームページ:<http://www.nig.ac.jp/>



自然科学研究機構・
生理学研究所・
分子神経生理部門
非常勤研究員
(ポスドク)募集

研究内容:糖鎖は細胞間相互作用に重要な役割を果たしています。本公募では神経発生や神経疾患における糖蛋白質糖鎖の役割解明に意欲を持って取り組む人を募集します。

募集対象:生理学研究所非常勤研究員 1名
応募資格:平成17年10月1日現在35歳未満で、理科系大学院博士号取得者および取得見込みの方(糖関連の研究に従事されていた方が望ましい。神経系の研究でなくても可)
勤務地:愛知県岡崎市明大寺町字東山5-1
待遇:給与等の支給月額(約27万円、条件により異なる)、

通勤費支給(上限55,000円)

着任時期:平成17年10月1日

契約期間:年度ごとの契約更新で、最長3年間

提出書類:1)履歴書 2)これまでの研究概要(A4判用紙1枚程度) 3)研究業績リスト 4)推薦書

応募締め切り:平成17年8月26日(金)

連絡先:

〒444-8787

愛知県岡崎市明大寺町字東山5-1、生理学研究所・分子神経生理部門、池中一裕

Tel 0564-59-5245

e-mail ikenaka@nips.ac.jp



脳神経病態制御学講座
神経生理学分野教授
候補者の公募について
(依頼)

時下ますますご清栄のこととお慶び申し上げます。

さて、本研究科医科学専攻脳神経病態制御学講座神経生理学分野担当の小澤瀨司教授が平成18年3月31日限りで定年により退職するため、後任の教授候補者を選考することになりました。

つきましては、貴学及び関係機関等において適任者がおられましたら、平成17年8月27日(土)(当日消印有効)までに、下記の書類を添えてご推薦くださいますようお願い申し上げます。

なお、同専攻分野は大学院教育では神経生理学の講義・演習・実習を、医学部医学科の教育では生理学(神経・筋生理)の講義・実習、病態生理学(神経系)講義の一部、基礎系チュートリアル教育及び教養教育の一部を担当していることを申し添えます。

また、教授候補者は大学院における研究指導及び講義担当の適格性、講義担当科目への適合性について、文部科学省大学設置・学校法人審議会による審査を受ける予定です。

記

推薦書(任意様式) 1部

履歴書(別紙様式, 写真貼付) 1部

業績目録(別紙様式) 1部

主な原著論文の別刷10編 各1部

最近10年間の科学研究費補助金等の受給状況(別紙様式) 1部

神経生理学における教育及び研究についての主張と抱負(2,000字程度) 1部

付記:選考過程で状況によりご来学願うこともありますので、ご了承願います。

別紙様式については、本学ホームページからダウンロードできます。

また、電子メールでご請求いただければお送りいたします。

(公募書類送付先)

〒371-8511

群馬県前橋市昭和町三丁目39-22

群馬大学昭和地区事務部総務課人事係

(封筒の表に「脳神経病態制御学講座神経生理学分野教授候補者応募書類在中」と朱書きし、郵送の場合は書留でご送付願います。)

(問い合わせ先)

群馬大学昭和地区事務部総務課人事係

電話 027-220-7806 FAX 027-220-7720

E-mail:m-jinji@jimu.gunma-u.ac.jp
 ホームページのURL <http://www.med.gunma-u.ac.jp>

他のサイトへのリンクは原則としておこなっておりませんのでご了承ください。

締切は通例偶数月の月末25日ですが、都合により変動することがあります。

掲載料は不要です。

原稿の送付の宛先は以下の通りです。

news@jnss.org (担当 白尾智明)宛お送りください。

cc を tshirao@med.gunma-u.ac.jp 宛にもお送りください。

その他



神経科学ニュースへの 原稿を募集しています

求人情報、学会・シンポジウムの案内、助成金の案内のほかにも、学会への提言、研究雑感、学会見聞録、書評等神経科学の発展につながるものであればどのようなものでも結構です。以下の要領でお送りください。

原稿は電子版のみを受け付けています。原稿は電子メール添付ファイルでお送り下さい。

受付可能なファイル形式はWord(2001以前)、EG Word(11以前)、KacisWriterです。それ以外にも或る程度対応可能ですが、事前にご相談ください。また作製に用いたアプリケーションに関わらずHTML, rtfファイルは受付可能です。テキストファイルも可ですが、その場合メール本文に埋め込んでください。

画像ファイルはPICT、JPEGまたはTIFFファイルで、可能な限り圧縮して本文とは別のファイルでお送りください。

校正は行いません(お送りいただいたファイルをそのまま利用します)ので、誤りの無いことをお確かめの上、原稿をお送り下さい。ニュースへの掲載は1回のみとさせていただきます。

求人情報、学会・シンポジウムの案内、助成金の案内などは特に御希望のない限り、神経科学会のホームページにも掲載します。記事の長さに制限はありませんが、可能な限り簡潔におまとめ下さい。長すぎる原稿は一部割愛させていただきます。

編集後記

いよいよ神経科学大会が間近に迫ってきました。プログラムに付随してCD-ROMが会員諸氏のお手元に届いていると思いますが、今月号では、実際にこのCD-ROMの開発に携わった東京大学の地村弘二先生に、CD-ROMの使い方を易しく解説して頂きました。記事中にもありますが、未だ開発途上だということで、今後会員諸氏の意見を取り入れて改良して頂けるそうなので、ご意見をお寄せください。ところで、今月号では、男女共同参画に関する記事が二つ掲載されています。私も実際に生理学会での小田洋一先生の御講演を拝聴させて頂きましたが、小田洋一先生が、小田・望月紀子先生ご本人を目の前において「私の女房が」と発言されるのを聞き、「実に幸せな家庭生活を送っていらっしゃるのだな～」と感心いたしました。男女共同参画の問題に関しては、いろいろなご意見をお持ちの方が多数いらっしゃると思います。誌上を使って活発な意見交換がおこなわれることを希望しますので、積極的なご投稿をお願いいたします。(白尾記)

発行：広報委員会

狩野方伸(委員長)

白尾智明(ニュース編集小委員会委員長)

真鍋俊也(電子化推進小委員会委員長)

柚 通介(ホームページ担当小委員会委員長)